

#### 第4章 リベラルゆえの「反イスラム」ー環境・福祉先進国の葛藤（103-130項）

##### ○なぜイスラム批判のポピュリズム政党が躍進しているのか（106項）

「近代的価値を承認した上で、」イスラムの「『後進性』を非難する」論理、すなわち「『啓蒙的排外主義』」（115項）が「主流化しつつある」から（128項）

反民主的・人種差別的イデオロギーに基づき移民を排除するのではなく、『リベラル』な価値を守り、『デモクラシーを守る』がゆえにイスラム系移民を排除する」

##### ○ポピュリズム政党が躍進した結果

デンマーク、オランダ両国ではポピュリズム政党が強い影響力を与えた結果、「両国の移民・難民政策は大幅に厳格化」された（106項）

##### ○デンマークでのイスラム批判が受け入れられた背景（112項）

背景（112項）：

- 1.デンマークでのムスリムによる数々の事件（112項）
- 2.「言論の自由」（112項）  
ー「『イスラム批判を行う自由』そのものに対する広範な支持」

##### ○オランダでのポピュリズム党躍進の歴史（112項ー128項）

###### 1.オランダの移民問題、政策の転換（113項ー114項）

「外国にルーツを持つ住民は現在、人口の二割に達している」（113項）

「多文化主義」（114項）→フォルタインによる『啓蒙主義的排外主義』（114項）

###### 2.オランダでポピュリズム党であるフォルタイン党が躍進した契機（112項ー117項）

「相互に批判し」ていた「二大既成政党が手を結び」「有権者からは選挙における選択肢を喪失させたと受け止められ、幻滅を呼び起こした」（116項）

→「不透明な政治の改革」を訴えるフォルタインに「無党派層を中心に強い支持が集まった」（117項）

###### 3.ウィルデルス党（120項ー128項）

(i)ウィルデルス党が躍進した契機（１２０項）

「国民投票での批准は当然のこととみなされていた」「ヨーロッパ憲法条約を国民投票で否決」したことで、「オランダにおける政治エリートと国民の乖離をさらけ出した」

（１２０項）

→「強力なポピュリズム政党の出現を助けることとなった」（１２１項）

(ii)ウィルデルス党の主張（１２２項－１２３項）

「『自由』を脅かす存在としてのイスラム批判」と「既成政治に対する批判」

(iii)ウィルデルス党にかけられる期待（１２３項）

「『アウトサイダー』的存在であるウィルデルスは、『市民』の気持ちを理解し、それを直接政治の場でぶつけ、変革をもたらす存在として期待されている」

(iv)ウィルデルス党の「『一人政党』という独自モデル」（１２５項）

「ボスマによれば、インターネットの発達した現代においては、市民と直接コミュニケーションをとり」意見を汲むことが可能で、「党組織を作ることはむしろ、自由党の官僚制化や硬直化を招く危険がある」（１２６項）